



Title	西村碩園先生の思ひ出
Author(s)	神田, 喜一郎
Citation	懐徳. 1966, 37, p. 89-91
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/90425
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

他俗諺、小唄を作られたこともあつたらしく、ある時に「かういふ作品は今日誰が作つたものか知る人もなからうが、世に傳はる作品には、さういふものが多いものだ」といふ意味のことを話されたことがある。朝日新聞の「天聲人語」の標題も先生の命名であることを話された。

○先生は一見豪快な人であつたが、それでゐて極めて方

西村碩園先生の思ひ出

大正五年七月十七日。わたくしはその日をいまに忘れることができない。宇治の花屋敷で開かれた文會の席上、わたくしは西村碩園・長尾雨山・磯野秋渚の三先生をはじめ、武内義雄・石濱純太郎の兩先輩に、はじめてお目にかかったのであるが、それが機縁となつて、兩來これらの諸先生からどれほど懇篤に提擧していただいたことであらうか。この日の文會は、ある意味からいって、わたくしの一生の學問を大きく支配した一つの動因となつたともいへよう。その文會といふのは、大阪でかねて組織せられてゐた景社と、京都で新しく發足した麗澤社

西村碩園先生の思ひ出

正謹嚴な方であつた。忠君愛國の心に厚く、殊に常に親に孝といふことを説かれた。眞に至誠の人であつた。先生が始めて京都大學の講壇に立たれたのは大正五年の九月からであつたと思ふ。それから三・四年の間、日夕薫化の恩に浴した。今は同じく聽講した學友も多くは凋落し、うたた今昔聚散の思に打たれる。

神田喜一郎

の合同會で、景社側から碩園・雨山・秋渚の三先生、麗澤社側から内藤湖南・狩野君山・富岡桃華の三先生がそれぞれ臨席せられ、武内・石濱の二氏は景社の社員、わたくしは麗澤社の社員の一人として出席したのである。いま思ひ出して、その日のわたくしの感激は實に大變なものであつた。

わたくしはその日二篇の漢文を持參した。一は「論文」と題し、一は「書那珂通世遺書後」と題するものであつた。二篇ともに内藤・狩野兩先生にはすでに添削していただいてゐたもので、それを淨寫して持參したのであ

る。西村先生も長尾先生も席上親しく硃筆を執って直して下さった上、いろいろ細い御注意を賜ったばかりでなく、最後にそれぞれ御批評の言葉を書いて下さった。ところが西村先生は「論文」と題する一篇については、よく御覽は下さったが、格別これといふ御注意もなく、そのままお返しになった。ところが翌々日、まったく思ひもよらず西村先生から御手紙を頂戴した。何事かと胸をとどろかしながら早速開封すると

啓者昨日景社にて拜見の文論拙評附記いたし度思考中酒飯と相成其儘に散し申候間別昏差上候匆匆頓首

丙辰七月十七日

時彦

神田君 梧右

との御手紙で、別に

文之大本看得既透文亦規模二劉纏々可誦子衍年僅弱冠有此大作後世可畏也但譏評古人有當有不當蓋局於措辭不能暢達旨意爲憾斯體時或一作之可也不可常々模倣恐傷于雕琢而害古文渾厚之氣老生幸與子衍同社相見宜直言相益故附言如此不知子衍以爲何如

丙辰七月

邨彦拜讀

と認められた一枚が同封されてゐた。わたくしは幾度か敬讀して、先生の御親切な教言に感泣これを久しうしたことであつた。わたくしの「論文」と題する一篇は、そ

のころ生意氣盛りであつたわたくしが聞きかじりの知識をもとに、文章はよろしく駢散不分の間にあるべきであるといふ風なことを、いつかど汪容甫などの文體を眞似たつもりで書いた、まったく鼻持ちならぬ氣障なものであつたのである。特に桐城の義法を宗とせられた西村先生から頂門の一針を加へられたのも當然である。因に先生の文中に子衍と書かれてゐるのは、わたくしの字であることを斷つておく。

ところで西村先生から賜つた御手紙は、日附が「七月十七日」となつてゐる。おそらく先生は、右の御批評を當夜大阪に還られるなり直ぐにお認めになり、さうして翌十八日朝に御投函になるつもりで、御手紙には「昨日景社にて」云々と書かれ、日附には「十七日」と書かれたものと想像せられる。いま更めて御手紙の封筒を調べてみると、まさに七月十八日午前十時から十一時までの消印である。ともかく當夜早速にお認め下さつたことは殆ど間違ひない。本當に先生は御親切であつたと思ふ。

爾來、西村先生から蒙つた鴻恩は實に筆紙に盡くし難いものがある。大阪の北區松ヶ枝町の御宅に伺つて、いろいろ御教示を仰いだこともある。それらはまた別に稿をあらためて書くことにしよう。但だそれほど先生の御恩顧を蒙つたにも拘はらず、わたくしの頑愚にして、そ

れに何等お酬ひすることもできないで、いまは頽然として老病併せ至る身となりはててゐるのを慙づるばかりで

ある。

父の少壯時に關する資料

内 藤 乾 吉

父（内藤湖南）は明治三十二年三月十二日に、東京小石川江戸川町で火災に遭つて、あらゆるものを焼いてしまったので、父の手許にあった父の少壯時代に關する資料は一空した。父の三十四歳の時のことである。それ以前のことの中、慶應二年七月十八日の生誕から明治二十年八月秋田縣北秋田郡綴子（つじこ）小學校の訓導を辭して東京へ出るまでのことは、父の晩年に次男耕次郎が父の口述を筆記したものがあつて、これは昭和十八年に「學海」という雜誌に載せたことがあるから、知っている人もあるうと思ふ。出京までのことについては、この外にも、報知新聞秋田版に、昭和四年八月十三日から二十三日までの間に九回にわたつて「名士の少年時代」という讀み物として載つたものがある。この新聞は私の手許にはないが、昨年父の郷里である秋田縣十和田町毛馬内の高橋克三氏が、父及び同郷の石川伍一氏の生誕百年記念に出版

した「湖南先生と伍一大人」の中に收録されている父の高橋氏宛書翰に「報知新聞の記事は誤謬多く候へばあのままにて保存は迷惑に有之候」とあるので、はじめてこのようなものあることを知つたのであるが、先日高橋氏にその記事の複寫を送つてもらつた。これは報知新聞の記者が父の話を書いて書いたのに相違ないものではないが、記者の潤色が多分に入つて居るのみならず、記者の誤解と思われるふしも多いものである。父の刪削の朱筆が入っているのは、高橋氏のもとに應じてしたものと想像されるが、綿密に訂正してあるわけではない。ただ耕次郎の筆記には見えない事實も若干含まれているので、その點は参考になるものである。

出京とともに父の操觚者時代が始まる。その時分に筆を執つた雜誌、新聞も、父の手許にあつたものは勿論火事で焼けてしまつたが、父が郷里の父（調一、號十灣）